

いろいろな不自由

校長 高田 晶子

校内の金木犀の甘い香りが、秋の気配を感じさせてくれています。最近は季節を堪能する間もなく移り過ぎていくように思います。外気を室内に取り込み、深呼吸をして、ゆったりと時を過ごしていきたいものです。

さて、コロナ禍の中で新しい生活様式をと言われ、今までとは違う観点を持って生活をするようになったせいか、「不自由な」という言葉を何度となく目にするようになりました。その中から、いくつか考えてみました。

まず1つ目は、「戦争を経験して生き残った世代の人間は、**戦争中の不自由さ**をありありと思い出す」という、僧侶の瀬戸内寂聴氏が掲載した記事についてです。

「人間の智慧（ちえ）とコロナの競争は、品を更（か）え質を更えても、繰り返しつづき、果てるときにはないのではないか。」と瀬戸内氏はまとめていました。

元郷中学校でも、9月に戦時中の学童疎開の話进行学习しました。現在、日高にお住いの大塚チエ子様より体験談をお寄せいただき、教頭先生の朗読により、全校生徒が学びました。生徒の感想から、「今の時代は幸せなんだ」「満足に食事もできず、夜も眠れなかったんだ」「自分だったら疎開の生活は我慢できない」「英語は使えない、紙はない、落ち着いて勉強ができないなんて」など、今の生活に置き換えて考えている生徒も多くいました。戦時中の話は、このコロナ禍に重ね合わせて考える良い機会になったのかもしれない。

2つ目に、「不自由 みんなの問題になった」という、コラムニストの伊是名夏子氏の記事です。「障害者は社会のお荷物だ」という意識が世の中にある限り不安をぬぐえません。旅行できない、受験できるのかといった**コロナによる不自由**は、障害のある人の日常です。『障害者なんだからできなくて当たり前』とされてきたことがみんなの問題となった。」
本当の不自由ってなんだろうか？考えさせられる、記事でした。

3つ目は、「学ぶチャンスは誰にでも」という記事を、ウェブ制作会社「仙折」社長佐藤仙務氏が掲載していました。「寝たきりで、左手の親指を1センチ動かせるだけの私が高等教育を受けられるようになったのは、テクノロジーの進化のお陰といえる。もっと社会全体で有効活用できれば多くの障がいがある人たちが、高等教育に挑戦できる。本来障がい者にも学ぶ権利があり、学ぶチャンスもあるのだから。1年前にオンラインの環境で経営学修士を取得し、仕事に就き、同じような障がいのある方を雇い、ささやかながら納税もしている。」

10年前には大学をあきらめていた時代。オンライン教育はもうそこまで来ているということだと感じています。皆さんは、いかがでしょうか。